

モザンビーク人難民キャンプ 訪問記

富岡明子

1990年7月1日、私は生まれて初めてアフリカの地に降り立った。前年に、アメリカのパサディナ市立大学で結成されたスチューデント・トランスポート・エイド（以下STA）というボランティア組織に参加し、メンバー14人とともにマラウイのモザンビーク人難民キャンプを訪れるためである。メンバーの国籍は、アメリカ、イギリス、ドイツ、ノルウェー、日本と多様であるが、うち半数はケニアに住んだ経験があるか、あるいは両親が現在もケニアに住んでいるというムズング（スワヒリ語でガイジン）である。このSTAの発起人であるダンとレンガイは、以前ナイロビから南アフリカまで車で縦断する際、モザンビークをジンバブエ軍のコンボイとともに走行した。この時、無政府状態の下で数十万のモザンビーク人が飢餓やゲリラの攻撃から逃れるために難民と化す悲惨な状況を目の当たりにし、留学先のアメリカでSTAを結成、ケニア・インターナショナル・スクール時代の交友関係を駆使して、世界各国の学生に、学生による援助を呼びかけた。私は留学先のパサディナ市立大学でこの活動を知り、以前から興味があった難民問題や援助問題に加えて、アフリカというものを自分の目で見たくなり、この活動に参加したのであった。

STAの主な活動—資金集めは、私がアメリカを

去った後、かなり精力的に始められた。大学側の支援もあって、地元紙やローカルニュースでアピールし、個人だけでなく企業、団体からの募金をつのる一方、大学のキャンパスなどでアフリカのアクセサリーやTシャツを売って資金を集めた。こうして集まった1万6000ドルは、全て難民救済のための資金として、かねてから計画していたとおり、中古のランド・クルーザー購入に当て、残った資金は直接現地に持っていき、何を一番必要としているのか実際に見てから使うことにした。

こうして、日本から最後のメンバーである私が到着すると、STAのメンバー14人はマラウイに向けてナイロビを出発した。寄付する予定のランド・クルーザーと、ナイロビ在住のメンバーの車、ランド・ローヴァーの計2台に、14人がすし詰めになってマラウイまでの道のりを行くことから、決して快適な旅とは言えない。加えて全員が学生であるから、宿も食事も極力節約しなければならない。ケニア、タンザニアを南下し、マラウイの首都リロングウェまでの約4週間のうち、半分はキャンプ（というか野宿）、半分は安宿に雑魚寝という生活であった。キャンプは、場所によっては野生動物に襲われる危険があったり、さもないと警官に立ち退かされるという難点はあったが、安宿で南京虫に襲われるよりはずっとましな生活であ

った。また、私は何でもおいしく食べられる得な性質と、強靱な胃袋のおかげで、食生活には全く困らなかった。蠅がたかろうと、虫がついていようと、食べることは旅の間私が最も楽しみにしているものの一つであった。私が苦しんだのは、むしろトイレやシャワーであった。トイレはたとえ存在していても水が出ないか便器が壊れているかのどちらかで、使いものにならない。シャワーは4日に1回ぐらいは浴びることができた。と言ってもお湯がありがたみも感じられないほどザーザー出てくるわけではない。バケツ一杯の水を、それは大事に使った。しかし、こうして必要最低限の、飾る必要のない生活に慣れてみると、それがかえって快適なものに思えてくる。普段いかに無駄の多い生活をしていることか。

さて、われわれはマラウイの首都リロングウェを抜け、南部のブランタイヤに向かった。リロングウェは行政上の首都ではあるが、実際はブランタイヤの方が規模が大きいうえ、南部に集中する難民キャンプにも行きやすい。ブランタイヤはマラウイ最大の都市というだけあって活気に満ち溢れている。街並みは整然と美しく、店には品物が豊富に並んでいる。ここでは品不足という言葉は聞かれない。それもそのはず、これらの品物はほとんど南アフリカから輸入されたものなのである。タンザニアやケニアでは見られなかった南アフリカ製品が、あまりに平然と売られているので少々驚いてしまった。しかし、よく考えれば、マラウイほどの小さな国、しかも内陸国であり、これといった資源も産物もない国が、近隣の大国である南アフリカを頼らずに、どのようにしてやっていくことができよう。政策上は南アフリカと非友好的なマラウイであるが、人々は現にこうして、生活していくうえで必要な食糧や品物を買うことを選ぶのだ。そして私を最も驚かせた事実、マラ

ウイがそれほど小さな国であるにもかかわらず、世界で最も多くの難民を受け入れている国の一つだということである。モザンビークと国境の半分以上を接しているという位置関係も大きな理由ではあるが、1989年までに人口の約10%に達する80万人の難民を受け入れている、まさに難民受け入れ大国なのである。

ブランタイヤでやらなければならない課題はたくさんあった。まず、難民キャンプを訪れる前に政府、警察の許可をとる。この許可なしには難民キャンプへ入れない。次に、濫立する難民救援団体を幾つか回り、寄付する自動車を有効に使ってくれる団体を探す。そして、実際に難民キャンプを訪れ、残り約6000ドルの使い道を検討する。難民キャンプに入る許可は、以前から申請していたこともあり、取得には問題なかった。最も慎重にしなければならないのは、どの救援団体とタイアップし、自動車を託すかという選択であった。われわれは2～3人のグループに分かれて、赤十字、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)、アフリケア、セイブ・ザ・チルドレン・マラウイ (SCM)、ノルウェー難民救済委員会等を訪問、それぞれの活動内容を聞き、われわれの計画について助言を求めた。私はもう一人のメンバーとともにUNHCRを訪れた。彼らは非常に協力的で、難民キャンプの地図や資料などを提供してくれたものの、キャンプでの実質的な活動が不鮮明で、タイアップした場合、どこまでわれわれの意向をくんでくれるか不安が残った。大きな組織は、総括的なことには強いものの、現地での実質的な活動に関しては小さい組織の方が把握しているようである。STAのメンバーで話し合った結果、UNHCRや赤十字は、組織が大きすぎるうえ、学生だけの弱小組織など相手にしてられない、という態度が感じられたので、結局われわれはこの二つの組織からは

身を引くことにした。アフリケアやSCMも決して小さな組織ではないが、前者2団体と大きく違う点は、運営が完全に現地化されているところであり、より草の根的な活動に重点がおかれていることである。特に、SCMはわれわれの訪問を歓迎し、難民キャンプの案内もかって出てくれた。そんなわけでわれわれはSCMとタイアップすることを決定した。

8月1日、ブランタイヤを出発したわれわれは、2時間ほど車で北上し、ムワンザ難民キャンプに到着した。キャンプに駐在するSCMのカペリ氏他3名が出迎えてくれた。あとはもう、難民たちがあまりの珍しさに怒濤のようにわれわれを囲み、押すな押すなの大騒ぎ。特に、物珍しさからか、唯一の東洋人である私に人気は集中した(これはアフリカのどこへ行ってもそうだったが)。私はまず難民の多さに圧倒されたものの、自分が描いていた難民キャンプと現実のそれとの違いに驚いてしまった。人々の表情は生き生きとしていて、健康状態も極端に悪いわけではない。しかし、それもそのはず、ここムワンザには昨日国を棄ててきたという難民はほとんどいない。南部のムランジェやマラウイ湖のリコマ島などは、モザンビーク国境に近いので、内戦が下火になった現在でも1日2000~3000人は流入してくるそうである。こうした難民は極端に健康状態が悪く、栄養失調、疲労、疾病などで死亡率も高い。彼らは国境近くのキャンプである程度健康を回復してから他のキャンプへ送られる。なにしろ数十万という数なので、次々と新しいキャンプを設けなければ追いつかない。そういうわけで、ムワンザ難民キャンプも2年前にできたばかりの比較的新しいキャンプである。現在ここに収容されている難民は約1万4000人、しかし増え続ける難民を見越して、2万人は優に収容できるそうである。確かに、歩いて回ったら

1週間はかかってしまうほどの広さはある。食糧・衣料の配給、健康状態のチェックなど、キャンプの管理は想像以上に大変である。ムワンザのキャンプは全体が大きく三つぐらいに区切られていて、それぞれがさらに100世帯をひとつのまとまりとして区切られている。マラウイ政府がキャンプの責任を負っているが、実際の管理はボランティアや民間組織に任されている。こうして幾つかの組織がキャンプで活動しているものの、ほとんどお互いに交流がないようである。それでも、赤十字は医療関係、SCMは食糧関係というように、大体の役割り分担は決まっていて、キャンプの管理はかなりスムーズに行なわれている。

さて、われわれはSCMのスタッフに案内され、難民キャンプの様子をつぶさに見ることができた。まず私は、難民が実際に生活している住居をのぞいてみた。それは家というよりも土でできた円形の小屋で、彼らは10人ほどの家族単位で生活しているのだが、どう見ても10人が寝られるような広さではない。しかし中はかなり衛生的で、意外に暖かい。家の中には毛布が2枚、彼らの全財産である。家をわりふられている人々は、少なくとも半年前からムワンザにいる人々で、新しい難民は100人以上も収容できる大きな簡易宿泊所で生活しながら、家がわりふられるのを待っている。次に私が興味を持ったのが、100平方メートルほどの土地にほうれん草が青々と育っている、野菜畑であった。輸送、保存が難しいので、難民にはほとんど野菜が支給されない。その結果、多くの難民はビタミンが極端に欠乏している。それを少しでも改善するために作られたのがこの野菜畑であり、難民が交替で畑の世話をするため、彼らに労働意欲と責任感を持たせるのにも一役買っている。この畑に柵はないが、いくら空腹でも畑泥棒する者はいないそうである。次に、30分ほど歩き、井戸

へ行ってみた。井戸は女たちの溜り場で、水汲みの順番を待ちながら、文字どおりの井戸端会議をしている。ムワンザキャンプには井戸が二つあり、これでも水の条件はかなりよいということである。キャンプによっては、一つしかない井戸が涸れてしまい、水不足になることもあるという。次に私はキャンプ内の病院へ行ってみた。そこはSCM管轄の、主に子供のための病院であったが、はたして病院と呼べるかどうか、医療器具はひとつたりとも見当たらず、看護婦が1人いるだけであった。ベッドもなく、コンクリートの床にむしろを敷いた上に、栄養失調の子供たちが寝かされている。頭の大きさに比べて体が異様に小さい。身動きせず、音にも光にも反応しない。これが、難民という最悪の条件の下で犠牲になっている子供たちなのだ。人間としての必要最低限の生活条件も満たされない状態というのは、恵まれた人間がどんなに想像しようとも、その想像をはるかに越えるものがある。そして自分が今していることに改めて疑問を持ってしまった。私はどれほどのことをしているのだろう。どんなことをしたってこの子供たちを救うことはできない。世界には、数百万という同じ状態の子供たちがいる。誰かひとりを救っている間に、何人かの子供たちは死んでゆく。誰を救うかは、救う側の偶然的な選択にかかっている。人を救うということは、恐ろしい傲慢であり、人をひとり救おうと思えば思うほど、自分の無力さを感じなければならない。私は本当に、逃げ出したいくなってしまった。

ムワンザ難民キャンプのほとんどの子供たちは

元気である。昼間は1日中サッカーに興じ、気が向けばキャンプ内の学校に行き、ポルトガル語の代わりにマラウイの国語、チチェワ語を習う。夜はあちこちから太鼓の音が響き、大人も子供も歌いながら踊り狂っている。そのたくましい太鼓のリズムと美しい歌声を聞いていると、ここアフリカの人々の力強さと陽気さ、美しさに感動し、涙が出てくる。時々思い出したように報道されるアフリカの難民の極端に悲惨な映像は、確かに現実であり、難民という存在自体の縮図であり、また、救援を求めるための効果的な手段でもある。難民キャンプの女たちの井戸端会議や子供たちのサッカー、緑の野菜畑の映像は、決して報道されることはない。しかし、私にとっては、かえってこれらの場面の方がショックであった。彼らはどんな境遇にあっても、力強く、まさに生きるために生きている。難民を少しでも助けるという目的でアフリカに来た私だったが、逆に多くのことを学び、助けられたような気がする。

ブランタイヤに戻ったわれわれは、結局ランド・クルーザーを食糧・生活物資配給のための輸送手段としてSCMに寄付、また、6000ドルは井戸を掘るための資金、毛布100枚という目録で、ノルウェー難民救済委員会に託した(井戸はリコマ島のキャンプに二つ掘られ、毛布は各キャンプ内の病院に寄付された)。仕事を終えたメンバーは、少しずつマラウイを離れていった。私を含め、残る4人のメンバーは、もう1台のメンバー所有のランド・ローヴァーで、ザンビア、ジンバブエ、タンザニアを走りながら旅を続け、8月29日、ナイロビに戻った。まる2カ月の長旅であった。

(とみおか・あきこ/津田塾大学)